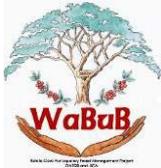


WaBuB PFM News

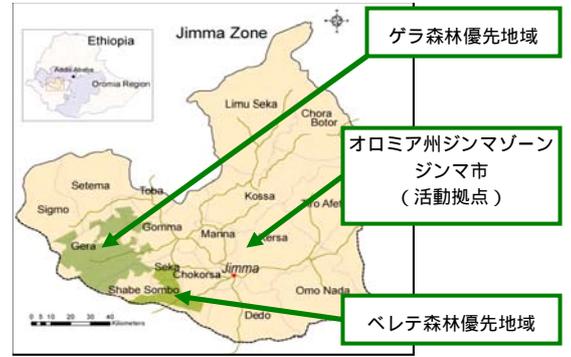
~ Respect Local People's Knowledge for Sustainable Forest Management ~



JICA 技術協力プロジェクト

エチオピア ベレテ・ゲラ参加型森林管理計画フェーズ2

2009年5月31日発行 (第27号)



停電と断水の日々再来...

少し御無沙汰してしまいましたが、中間評価も終わってほっと一息ついたところ、本格的な乾期に入って今年も停電と断水が頻発しています。プロジェクトの方は、新たな WaBuB 組織化に向けた森林境界画定作業や約140の WaBuB Field School(農民の学校)の支援、森林コーヒー認証の新規取得に向けた研修の準備などが始まっており、フィールド帰りにシャワーも浴びられないと、どっと疲れが出てしまいます。しかし、さすがに毎年となると、用意や心構えも周到になってきました。できるだけ電気があるうちにコピーやパソコン業務は済ませるようにし、今も週末の頻発する停電に怯えながらこの原稿を書いています。停電の時は、早く帰って大人しく寝るかヨガでもします。水も出る時にバケツへためておき、ガスで沸かしたお湯と混ぜて水浴びをしています。先日は、熱湯を足にぶちまけて火傷をしてしまいましたが...。プロジェクト活動を遂行することも大切ですが、こうした不便やストレスと如何にうまく付き合っていくかも、途上国で生活していく上での重要な資質だな...と改めて気づかされる日々です。

第3回普及員(DA)合同研修を実施しました！

エチオピア国内で実施中の JICA 農業関連技術協力プロジェクトの合同により、これまで2回の普及員(DA)を対象とした研修を実施してきました(第19号、22号参照)が、今回、第3弾を農民支援体制強化計画プロジェクト(通称 FRG)の主催により実施しました。前回までの灌漑農業改善プロジェクト(昨年9月終了)に代わり、世界食糧機関(WFP)支援による農業プロジェクトを交え、特に前回の研修後に参加者から要望のあった普及や農業に関する技術の習得を目的としました。

まず、それぞれのプロジェクトの概要や普及方法について発表と議論を行いました。WaBuB プロジェクトでは、森林管理を目的とした活動の一環として WaBuB Field School(WFS)を農業技術の普及アプローチとして活用しており、主に昨年12月の卒業式(第25号参照)までの一連の WFS 実施の流れを DA が写真や歌、手拍子(クラブ)を交えて紹介しました。こうした共有を通して、農民とプロジェクトとの橋渡しとしての DA の役割を再認識してもらう他、これまでの経験や教訓を整理してもらうこともねらいとしています。技術研修では、FRG プロジェクトの研究員や試験場で活動する服部協力隊員が講師となり、トマトの栽培や優良種子の採取方法と、木酢液の生産方法の実習を行いました。トマトに関しては、WFS で導入している野菜の中でも人気が高いですが、DA としても十分な栽培知識がないために病虫害の被害が頻発したり、質の高い果実を生産するための選種や採種まで意識がまわらないのが実情です。



実際に炭焼きをして木酢液を採取します！



木酢液の使用方法を指導する服部隊員

また、木酢液は炭焼きの際に出る煙を蒸留することで採取できる液のことで、日本ではガーデニングの防虫対策として100円ショップでも見られるようになってきましたが、エチオピアでは見たことも聞いたこともありません。しかし、簡易な炭焼き自体は各地にあり、高価な薬品による防虫対策に較べれば、ちょっとした工夫による木酢液の活用は大きな可能性があると考えられます。実際に炭を焼いて木酢液を採取してみたことにより、自分たちでも出来るという手ごたえを掴めたようです。



WaBuB DA が作成したコンポスト普及教材。いまいち！

最後に、各プロジェクトで作成した技術普及教材(紙芝居など)を共有し、実際に小グループに分かれてオリジナル教材を作成しました。コンポストの作り方などのマニュアルは幾つかありますが、「どうコンポストの活用を促すか」「農民が簡単にできることを分かり易く伝えるか」といった啓蒙を目的としたポスターなどはあまりないものの、DA でも考案できる教材の1つになると考え、4コマ漫画を作成してもらいました。しかし、日本ではお馴染みでもエチオピアではほとんどないため、説明に苦慮しました。発表の後では、「テーマが明確でない」「技術の説明が不十分」...などと各グループに対して激しい批判が飛び交いましたが、こうした議論を通じて「普及教材」の意義や作成における留意点を考えるきっかけになっていければいいのですが...

ベレテ・ゲラ巡業 ～オバ・トリ村の巻～

第2ラウンドの WaBuB 組織化もいよいよ大詰めを迎え、約 50 集落において森林境界画定などの作業を村落開発普及員 (DA) が中心となって進めています。その中で、進捗が気になる村の1つがオバ・トリ村です。この村では昨年、DA が WaBuB に関して十分な説明がないままに住民へ強要してしまったため、「日本人が森を買いに来た！」などといった誤解が住民の間に生じてしまいました(第16号参照)。あれから1年が経ち、進捗や変化が気になるところです。

昨年までは1名の DA のみが活動していましたが、今は若い3名の DA がオバ・トリ村に配属されています。プロジェクトからもこの地域にフィールド・コーディネーターを配置し、重点エリアとして位置付けています。現時点で3集落において WaBuB 組織化が進行中で、6つの WFS (DA による支援5、農民ファシリテーターによる支援1) が実施されています。ゲラ森林の中でも奥地にあるためにアクセスが大変ですが、乾期の今は車で近くまで行けるためチャンスです。DA 達も月例会議で会う度に、「俺たちの WFS を見に来てくれ！」と自信満々です。



森林コーヒーが密生するオバ・トリ村周辺の森

というわけで、はるばるオバ・トリ村へ行くと、通信教育の試験のために DA は3人とも村を出たばかりとのこと。相変わらずタイミングが悪い私のせいかな？ 途方に暮れていると、農民ファシリテーターのジャミラ(女性)が噂を聞きつけ、生後6か月の息子(名前はオバマ)を背負って現れた。「水を運んできてやる」「村の案内は任せておけ」「コーヒー飲みに来い」などと、何かと気をつけてくれる。ありがたいかぎりだ。夜は暇なので星空の下で気功をしていると、フッと小さな光が幾つか舞っている。ヘイケボタルだろうか？ お尻のかゆみ(ノミ・ダニ)さえなければ、なかなか風流なところなのだけれど…。



WFS 指導をする農民ファシリテーターのジャミラ(右)

ジャミラを引き連れて、4日間かけて3集落の WaBuB 代表者に話を聞き、6つの WFS をまわることができた。どの集落でも、「森林管理は重要だから、早く境界画定作業を進めてくれ」「DA が非常に熱心だ」といったコメントで、昨年とは見違えるような状況だ。どの WFS も農地がきれいに整備されており、比較試験や観察がしっかり行われている。やはり DA の資質が WaBuB 組織化にも大きく影響するということが…。中でも感心したのが、ジャミラの指導力と熱心さだった。昨年までの WFS や研修の中ではあまり目立たなかったが、生き生きとメンバーの前で議論をまとめ、的確にアドバイスをしている。農民ファシリテーターとして努めてきたことが、彼女の能力を開花させる機会につながったと言えるのではないだろうか？ DA は異動したりしていずれは去っていく存在だが、こうした



トマトの病虫害といった「問題」に対し、メンバーで相談して対策を議論することも「組織力強化」の1つ

地域に根付いた農民のリーダーを養成していくことが、長い目で見た森林管理にはより必要となるであろう。

プロジェクト・プランニング会議

3月に実施された中間評価での提言の1つとして、「プロジェクト活動や成果を引き継いでいくため、エチオピア側がより活動のマネジメントに関する体制を築いていく」(第26号参照)ことが挙げられましたが、その最初の取り組みとして、活動の方針やスケジュール、予算などを郡の関係者と一緒になって計画するためのプランニング会議を5月23日に実施しました。今後は、毎月1回、各郡でマネジメント会議を開催し、エチオピア側関係者が主体的にプロジェクトを実施していくための体制作りをすすめていきます。

今年度のプロジェクトにおける抱負

早いもので2006年10月に始まったフェーズ2も、あと1年4ヵ月を残すのみとなりました。この間、組織化された WaBuB の数も90集落程度まで増えました。WaBuB フィールドスクールも昨年10月には1,349名の卒業を迎え、現在は農民ファシリテーター75名の参加により140箇所で開催されています。

結果を数量的に見れば、予想以上の成果が出ていると言えるのですが、将来的にもベレテ・ゲラの森林が保全され適切に利用されていくためには、WaBuB が森林管理組織として十分に機能する必要があります。この2年間は、フィールドスクール、森林コーヒーの認証といった生計向上につながる活動を実施しながら、WaBuB の数を増やしてきました。ベレテ・ゲラ森林内のほぼすべての村で WaBuB が組織化された今、WaBuB による「参加型森林管理活動」が本格的に始まることとなります。具体的には、各 WaBuB で管理している森の保全・利用方法を、メンバーで話し合って森林管理計画を立案し、実施に移していきます。コミュニティで苗畑を作り、苗木を継続的に生産し森が荒れているエリアへ植林を行う、また、フィールドスクールで習った、果樹や野菜等を組み合わせたアグロフォレストリー活動を集落内で広く普及するといった活動が想定されます。

認証を受けた森林コーヒーを将来的に WaBuB で管理・出荷していくために、隣接する3~5村単位での WaBuB の協同組合化を支援します。11月から始まる本年度の森林コーヒーの出荷は新設された WaBuB 協同組合を通じて行われる予定です。また、森林コーヒーのプロモーションの一環として女性グループによる手焙煎コーヒーの生産といったアイデアも温めています。

今年度は WaBuB による本格的な参加型森林管理活動がスタートします。この活動の実施には、フィールドスクールで農民ファシリテーターとして活躍している住民たちがリーダーシップを発揮してくれるのではと期待しています。森に住む住民が、自らの森を守り適切に利用していくことを目的に設立された WaBuB の新たなチャレンジが始まります。(チーフアドバイザー 西村 勉)